

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七



(寄稿)

に参加して

10回労働学校(1/10)

## 『臨調国鉄攻撃と労働者階級』 (杉田明講師)

国鉄当局は、1月10日、87年に民営化、90年までに職員数を18万人体制とする「経営改革のための基本方策」なる再建案を発表した。そのような情勢のもと、19日開催された労働学校は、これまで以上の大きな関心をもって臨んだ。

今回は、すでに活動家必携の書となった『臨調 国鉄攻撃と労働者階級』の著者である杉田明講師から講演を受けた。

10万人もの国鉄労働者の首を切る突破口としてある「60・3」を間近にひかえ、大きな激突の局面に直面している今日を、第一に、国鉄をめぐる攻防の新しい局面、第二に、中曽根による「戦後の総決算」と臨調行革攻撃、そして第三に、国鉄決戦と勤労千葉の闘いの三点にしばって鋭く、しかもわかりやすく展開された。

### 勝利争闘 ジェット 塚里三

#### 膨れ上る一方の「長期債務」

#### Ⅱ 「赤字」の元凶

42万人いた職員を「新採ストップ」や「退職」「合理化」強行によって、すでに32万人体制にまで要員を削り落してきた——にもかかわらず、「赤字」は増え続けている——。

まさに国鉄の財政危機は絶望的現状を示しており、その最大原因である「長期債務」という借金は6年間で2倍にも膨れあがっている。そもそも「長期債務」こそが国鉄を喰いものにしてきた歴代自民党の利権政治と大企業優先による必要以上の設備投資の結果として生まれたもので、それが国鉄財政を圧迫してきた。誰れもが赤字原因が「長期債務」にあることを百も承知で種々の「再建」を論じている。自民党、財界、臨調、国鉄当局は赤字を生みだしてきた自らの責任の一切をおおいかくし、国鉄労働者・人民にすさまじい合理化、要員削減、地方線切り捨て、運賃値上げという犠牲をおしつけ「再建」論を並べたてている。

人民と国鉄を、骨までしゃぶる。自民党

では本当に再建できるのか？否である。

中曽根内閣は、85年度国家予算作成にあたって「歳出削減はもはや無理」「税制の抜本的手直し」そして「増税による財政再建」しかないとしながら「しかし歳出削減一本やりでは人心はうむ。夢も盛りこみたい」とし、何んと臨調さえも「当分見合わず」としていた整備新幹線を自民党内の公共事業族、運輸族によって着工が決定された。それも分割・民営になつてはできないから国鉄として残っている時にやっつけてしまおうというもので、これまでの国鉄を喰いものにするなどという生やさしいものではなく骨までしゃぶるといふものだ。

中曽根はこの間「国民が等しく痛みをわかち合おう」などのペテンを弄し「増税なき財政再建」を錦の御旗に臨調・行革攻撃を行ってきた。

しかし、それも今や破綻しようとしていく。国の借金Ⅱ国債発行残高は一三三兆円に膨らみ、サラ金地獄に陥っており国鉄ばかりでなく、国の財政はすでにどうしようもない状態であるという。

#### 骨身を削る運動の

#### 反動性と破綻は明らか

国鉄当局は、過去6年間で10万5千名の削減を強行してきた。その結果「余剰



三塚里・国鉄決戦勝利の情熱にもえて、杉田講師の講義に聴き入る受講生。

人員問題」が発生し当局は国鉄労働者を職場から叩き出す「首切り三本柱」を発表した。ところが勤労「本部」革マルは、それと闘うどころか「57・11」、「59・2」と屈服し「ヒト（要員）カネ（賃金）モノはそのまま再建のため骨身を削って働こう」なる運動をはじめたが、大破産し、ついに「首切り三本柱」をのみこんだうえに労働組合が当局になりかわって組合員に向、帰休、退職を強要している。「骨身を削る労働強化はいとわな」運動が労働強化Ⅱ要員削減そして首切りを促進するというのは当り前のことである。さらに勤労「本部」革マルの犯罪性は10万人首切りの突破口としてある「60・3ダイ改」を一言も「反対」と言わず「骨身を削って働くⅡ60・3は便利になる」などと当局と手を組んで賛美している始末である。

講師は「『60・3』決戦を闘わずして分割・民営化が具体化したとき、10万人首切りとどうして闘うことができようか」と強調された。

(裏面へ続く)